

フランス宗教戦争の勃発

山田 慎人
(武庫川女子大学文学部英語文化学科)

The outbreak of the French Wars of Religion

Norihito Yamada

*Department of English, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

In April 1559 the long series of Habsburg-Valois wars was brought to an end in the peace treaty of Cateau-Cambrésis. For the next few decades, western European international relations were dominated by civil wars in France and the Habsburg Netherlands. This article examines how political and religious factors led to the outbreak of a series of religious civil wars in France, commonly known as the French Wars of Religion.

The first chapter describes the religious policies of Francis I and Henry II and the growth of Protestantism in France under their reign. Despite mounting persecution after the mid-1530s, Protestantism spread to many parts of France especially after the mid-1550s. Henry II was particularly alarmed by the spread of Calvinism among the nobility. At the end of the war in 1559, Henry was determined to give more attention to the religious problem in France. Instead, his premature death in July 1559 put the country into political and religious turmoil.

The second chapter examines events leading to the outbreak of the first religious war in April 1562. After Henry's death, the religious tension was exacerbated by a power struggle among noble families – such as the Guises, the militant defenders of the Catholic faith, and the Bourbons, who were sympathetic to the Protestant cause – to dominate Henry's young sons, Francis II (1559-60) and Charles IX (1560-74). Their mother, Catherine de Medici, tried hard to maintain a religious peace in France by means of a compromise between the two faiths, but in vain. The 'massacre of Vassy' in March 1562 provoked a Huguenot army to capture Orléans.

The third chapter provides a brief description of the war itself and explains how the absence of a large standing army and the crown's inability to fund military efforts for any protracted period of time prevented it from defeating the Huguenots.

To sum up, this article shows that the war defies a simple explanation and was caused by various political and religious factors including the untimely death of Henry II, the power struggle among noble factions, the desire of many noblemen to display their military virtue, the belief of many Catholics that Protestantism was a serious threat to the peace and stability of their community, and the impossibility of achieving doctrinal compromise.

はじめに

16世紀の前半から半ばにかけて、西ヨーロッパの国際関係の基調となったのは、言うまでもなく、

ハプスブルク家とヴァロア家の争いであった。この争いは、1559年のカトー・カンブレジの和約をもって、一応の終わりを告げる。この和約によって、フランスは、事実上カレーを確保して、遂にイングランドを大陸から締め出すことに成功すると同時に、東部国境地帯において、メスとトゥール、ヴェルダンを獲得した。これらフランスの戦利品は、フランスの領土統合を高め、東方への拡張の足がかりを与えた点で、長い目で見れば、非常に重要なものであった。しかし同時に、フランスは、いくつかの要塞を除いて、ピエモンテとサヴォイを、ハプスブルク家の重要な同盟者であるサヴォイ公に返還し、海軍の重要な拠点であったコルシカ島を、同じくハプスブルク家の同盟国であるジェノヴァ共和国に返還するなど、イタリアに保持していた土地をほぼすべて明け渡した。さらに、条約は、フランス王家が継承権を主張してきたミラノとナポリを、ハプスブルク家が所有することを明記し、イタリア半島におけるハプスブルク家の覇権的地位を確認した。当時は、イタリア半島の支配こそが、まさに15世紀末から16世紀にかけて明確な姿を現しつつあった、西ヨーロッパの国際体系の鍵を握るという見方が一般的であり、多くの人々は、この和約を、ハプスブルク家の勝利、ヴァロア家の敗北とみなした¹⁾。

もっとも、この和約が締結された時点で、これをもって、長年にわたる二つの王家の争いが終わりを告げると、確信をもって言える人物は、誰もいなかったであろう。条約の一方の当事者であるスペイン国王フェリペ2世は、長期の戦争による自らの支配地各地での疲弊から、長く続く平和を望んだが、国内におけるプロテスタンティズムの広がり直面したフランス国王アンリ2世が、同じくネーデルラントにおいて同様の事態に直面していた自分と、国内的な宗教的統一の維持のための協力に入ることを望んだ²⁾。実際に、1559年以降、両家の戦いが終わりを告げたのは、1562年に始まる宗教的内戦によって、フランスが無力化したからに他ならない。本稿では、16世紀後半の西ヨーロッパ国際関係に決定的な影響を与えることになるフランスの内戦が、どのようにして始まったのかを検討する。

1. フランソワ1世、アンリ2世とフランスにおける異端の広まり

フランスでは、1519年頃にはルターの教えがパリにまで伝わり、1521年には、信仰の問題に関して大きな権威を持つパリ大学神学部が、ルターの著作を異端と断じ、パリ高等法院とともに、パリ周辺での検閲を開始した。しかし、フランスにおける異端の迫害は当初それほど厳しいものとならなかった。一つの大きな理由は、典型的なルネッサンス君主である国王フランソワ1世が、異端には反対しながら、エラスムスに代表されるようなキリスト教人文主義に好意的な態度をとったことであった。ルターが『95カ条の論題』を発表した1517年にはすでに名声を確立していたエラスムスは、イタリア半島の人文主義者が、古典古代に没頭するあまりキリスト教から逸脱しているのを見て、人文主義は、キリスト教的真理への渴望を伴わない限り、無意味でありむしろ危険であると考えた。しかし、エラスムスによれば、当時のカトリック教会は形式的な儀礼主義の危機に陥っており、彼は、信仰を深めるためには、個人と神の直接の対話が必要だと説いた。キリスト教世界の分裂を何よりも恐れるエラスムスは、ルターの対立を煽るような言辭を嫌い、後にルターと決別するに至る。しかし、両者の考えは、既存の教会の形式主義の批判で一致しており、実際に、パリ大学神学部がエラスムスの著作を禁書としようとした際に反対したフランソワは、姉マルグリットと共に、福音主義的な教会改革を志向するフランスの聖職者達のサークル、所謂「モーのグループ」にも保護を与えた³⁾。

この比較的自由的な雰囲気の中、フランス国内でプロテスタンティズムは拡大していく。また、初期のプロテスタントが比較的穏健なルターの影響を受けたのに対して、1520年代後半以降、より急進的なカールシュタットやツウィングリの影響が強まり、1528年にはパリで聖母子像が破壊された。さらに、1534年10月18日には、パリを始め多くの都市で、日曜の朝にミサに向かう人々の目に着くよう、カトリック教会を批判したポスターが貼られるという、所謂「檄文事件」が起こった。これらのポスターは、ミサにおいてパンとブドウ酒がキリストの真の体と血になるというカトリックの教えを完全に否定し、それらをキリストの体と血の象徴にすぎないと考えるツウィングリの聖餐象徴説をとっていた。これは、パンとブドウ酒がその実体を保持したまま、キリストの体と血にもなるとするルターの教えより、はる

かに急進的であった。フランソワはその後数ヶ月間に多くのプロテスタント教徒を火刑に処するなど、事件に激しく反応した。1535年7月のクシー王令は、カール5世との戦いにおいて、ドイツ新教諸侯の協力を得るために、宗教的な罪を犯した者と宗教的亡命者に恩赦を与えたが、同時に、聖餐象徴説をとる者を恩赦から除外し、恩赦に6カ月以内のカトリックへの改宗という条件をつけ、改宗しなかった場合は、絞首刑にすることを定めた⁴⁾。

マック・P.ホルトが指摘するように、フランスでは、教会の保護者としての国王の役割は、他の諸国におけるより、はるかに重視された。国王は、まさに聖別式と呼ばれる戴冠の儀式において、異端と戦うことを誓い、聖油の塗布を受けて、戴冠され、その後聖体を受けた。同様の儀式は、西方キリスト教世界の多くで見られたが、フランスにおける戴冠式の宗教性は、他の諸国をはるかに超えるものであったと言われる。それは、国王に異端と戦う義務を課し、聖別や聖体拝領を通じて、彼が、世俗的なものと聖なるものの混合を体現する存在であることを、明確にした⁵⁾。フランソワが1534年の檄文事件に強く反応したのも、ミサにおける神の存在を否定する聖餐象徴説が、同時に人間的であり神聖であるはずの、自らの存在そのものを脅かすと考えたからであった⁶⁾。

もともと、1534年をもって、フランスにおける異端迫害の体制が、急に組織的な方法で強化されたわけではなく、それは、その後十年程の間に、徐々に整えられていく。特に、1540年のフォンテーヌブローの王令では、これまで曖昧であった、異端取締りに関する世俗と教会の裁判所の管轄を明確化し、世俗の最高司法機関である高等法院に異端取締りの包括的な権限を与え、すべての世俗の裁判官に、教会裁判所の管轄に入る主要な修道会の聖職者を除く、すべての人々を調査する権限を与えた⁷⁾。しかし、フランソワの治世末期の弾圧の強化にもかかわらず、パリ高等法院の管轄外の地方では異端を取締る法律が厳格に適用されなかったこともあって、フランスでプロテスタントイズムは広まり続けた⁸⁾。

1547年に王位を継いだアンリ2世は、同年、判決の厳しさから「火刑裁判所」と呼ばれるようになる、異端取締りの特別法廷をパリ高等法院の中に設置するなど、父フランソワより厳しく異端に対応した。しかし、弾圧の強化は、カルヴァンの指導するジュネーヴへの亡命者を増やし、その亡命者が1555年以降フランスに戻って布教と教会の組織化を行い、かえって異端が増えるという、皮肉な結果に終わる⁹⁾。

また、アンリの野心的な外交政策も、国内での宗教問題への対処を難しくした。1551年にアンリがドイツの新教諸侯と手を組んでカール5世に対して仕掛けた戦争は、フランスがメス、トゥール及びヴェルダンを奪って1556年2月に一度休戦に至るが、アンリは、再び年末にはローマ教皇と手を組んでイタリア半島でハプスブルク家に挑戦し、北部でもネーデルラント及び北フランスで、イングランドと手を組んだハプスブルク家と戦った。アンリが戦争に力を注ぐ間も、ジュネーヴからの伝道師達は布教を続け、これに対してアンリは、異端審問所の設立と反異端法の強化を図り、1557年2月のコンピエーニュの王令で、聖餐象徴説に固執する者や、ジュネーヴに逃れた者、キリストや聖人を冒瀆した者、違法な説教を行った者や違法な宗教集会に参加した者を死刑にすることを定めるなど、世俗の裁判所が異端に課すことのできる罰則を強化した。しかし、教皇権の拡大につながるものが危惧された異端審問や、宗教的な罪の厳罰化には高等法院が強く反対し、さらに、8月にサン＝カンタンでフランス軍が皇帝軍に歴史的な大敗を喫したこともあって、王令を実施させることもできなくなる。1558年5月に、数千人のカルヴァン教徒が、ルーブル宮の目と鼻の先で公の集会を開いた際にも、戦時に内政上の混乱を避けたいアンリは、激怒しながらも、逮捕者を釈放した。アンリは、宗教問題に本腰を入れて対処するために、ハプスブルク家との和平を真剣に追求するようになる¹⁰⁾。

この頃には、カルヴァン派は、主にフランスの南部から西部にかけて三日月形に広まり、その数は200万人弱、総人口の1割程度にまで増加したと思われる¹¹⁾。アンリが特に危惧したのは、この時期、カルヴァン派の信仰が、貴族層に急速に広まったことであった。なかでも重要であったのは、ルイ9世の血をひくブルボン家である。ブルボン家は、フランソワ1世の治世に、ブルボン公シャルルが、神聖ローマ皇帝カール5世と手を組んで反乱を起こし、領地を没収されて、力が衰えた。しかし、ヴァロア家が断絶した場合に王位を継承する権利を持つ筆頭親王家として、その存在は無視できなかった。1537

年にハプスブルク軍のローマ攻撃を指揮して戦死したシャルルの3人の息子のうち、長男のアントワンは、スペインとの境にあるナヴァール王国の王女ジャンヌと結婚した。ジャンヌの母は、プロテスタントに好意的な、フランソワ1世の姉マルグリットであり、ジャンヌは母の影響もあってプロテスタント教徒になったが、アントワンは、おそらく妻ジャンヌの影響で、1550年代には、プロテスタント教を実践するようになり、上述の1558年のパリにおける集会にも参加したと言われる。たしかに、アントワンの宗教的態度は曖昧であり、後にカトリックに復帰するが、次男のコンデ公ルイは、1558年にはプロテスタント教への改宗を公にし、内戦開始後に、ユグノーという名で呼ばれるようになるフランスのカルヴァン派のリーダーとなる。また、フランス軍の最高司令官としてフランソワ1世、アンリ2世の治世において宮廷で大きな勢力を誇り、内戦勃発後も国王軍の司令官として活躍したアンヌ・ド・モンモランシの妹ルイズの3人の息子達も、カルヴァン派に改宗した。なかでも、次男のガスパール・ド・コリニーは、内戦において、コンデ公と共に、ユグノー軍を率いることになる。これら以外にも多くの貴族がカルヴァン派に改宗したが、貴族の改宗は、しばしば封建的な主従関係を通じて一度に多くの人々の改宗につながったこと、また、カルヴァン教徒に安全な土地を与えた点で、重要であった¹²⁾。

フェリペ2世が期待したように、1559年の和平の時点で、アンリ2世が、宗教問題の解決を最優先課題だと考えたことに疑いはない。和平条約は、両家の平和を維持するため、アンリの娘エリザベートとフェリペ2世の結婚を約した。2人の結婚は、フェリペの側で代理人が出席し、6月22日にパリで行われたが、その8日後、結婚を祝うための馬上槍試合でアンリは重症を負い、7月10日に死去した¹³⁾。

2. 王権の弱体化と宗教対立の激化、1559～62年

アンリの死後、15歳の長男が、フランソワ2世として即位する。若い王の即位は、必然的に、宮廷での有力貴族の権勢争いを招いた。プロテスタント派は、新国王とその弟達に最も血の近い王族であるナヴァール王アントワン・ド・ブルボンとコンデ公ルイ・ド・ブルボンが、政権を掌握することを期待した。しかし、実際に権力を手にしたのは、最も戦闘的なカトリック教会の防衛者であるギーズ公フランソワと、その弟ロレーヌ枢機卿シャルルであった。ギーズ家は、いまだフランス国王の支配地には含まれないロレーヌの出身であり、フランソワとシャルルの父クロードが、奇しくもナヴァールとコンデの叔母であるアントワネット・ド・ブルボンと結婚したことで、フランス王家の縁戚となった。クロードは、フランソワ1世の下で数々の軍功を立ててギーズ公爵位を授かり、フランスの貴族となる。クロードの娘マリーは、1538年にスコットランド王ジェームズ5世と結婚し、1542年に2人の間に、娘メアリーが誕生する。メアリー・スチュアートは、父の急死により生後6カ月でスコットランド女王となるが、1548年にフランス王太子フランソワと婚約し、フランソワが王になる前年の1558年に彼と結婚した。新国王フランソワの叔父にあたるギーズ公フランソワとその弟ロレーヌ枢機卿シャルルは、アンリ2世の死の数日のうちに、若い王を自分達の影響下におき、アンヌ・ド・モンモランシやナヴァールを押しつけて、軍事、財政、外交、教会を含む政府のあらゆる権限を独占した¹⁴⁾。

フランソワの即位後、ギーズ公の影響のもと、プロテスタント教徒の迫害は厳しさを増し、異端の逮捕や処刑が急増した。このような状況で、カルヴァン派の小貴族達は、国王をギーズの支配から解放する目的で誘拐する計画を立てた。しかし、この計画は漏れ、1560年3月に、国王が滞在していたアンボワーズ城周辺に集結したカルヴァン派貴族達は、国王派によって捕らえられ即座に処刑された¹⁵⁾。

しかし、同時に、政府は、3月のアンボワーズの王令によって、説教師と陰謀に加担した者を除く、すべての宗教的囚人に恩赦を与え、プロテスタントの懐柔を図った。この王令にメディチ家出身の王母カトリーヌが関与していたことは、疑いない。カトリーヌは、自分の子供達が特定の貴族や党派に支配されることを望まず、王権が宗教的対立の調停者となって宗教的平和を回復することで、王位の安定と国内諸勢力からの独立を実現することを望んだ。カトリーヌは、高等法院の抵抗で適切に実施されなかったが、5月の王令でも、異端裁判を、高等法院を含めた世俗の裁判所の管轄から外し、死刑を宣告することのない教会の裁判所の管轄下においた。また、弾圧の限界に気付いたロレーヌ枢機卿も、穏健な政

策に参与したと思われる。実際に、ロレーヌ枢機卿は、教皇ピウス4世に、プロテスタント教徒のカトリック復帰を促すような教会改革を目的とした、フランス独自の宗教会議開催の必要性を説いた。独立したフランス国教会の成立を恐れるピウスは、当然これに難色をせめしたが、6月にフランスにおける最高位の公職である大法官に任命された、著名な法律家ミシェル・ド・ロピタルは、フランス独自の教会改革を目指し、その前提として、ブルボン家の兄弟を含めすべての有力者の政府への参加を実現する目的で、三部会のうち貴族会を8月に招集した。しかし、モンモランシがこの呼びかけに応えたのに対して、ブルボン家の2人は、筆頭親王家のメンバーとしての自分達の権利を主張する一方で、貴族会への参加を拒否した。貴族会では、両宗派の支持者が改革の必要を唱え、三部会の招集が決まったが、その間も各地でユグノーは軍隊を組織した。コンデの関与を知った国王は出頭を命じ、コンデはオルレアンで10月31日に逮捕され、裁判にかけられて11月26日に大逆罪で有罪を宣告された¹⁶⁾。

しかし、ちょうど同じころ、国王フランソワ2世の健康が急に悪化する。12月に開催されるはずの三部会の代表はパリに集結しつつあったが、国王が死去した場合、三部会が、まだ10歳のシャルルの摂政としてナヴァール王アントワン・ド・ブルボンを選出し、ギーズ家に代わってブルボン家が王を支配するようになることを恐れたカトリーヌは、断固たる行動に出た。彼女は、12月2日にナヴァールを呼び出し、ギーズ家兄弟も見守る中、ナヴァールを国王に対する陰謀の罪で責めた。ナヴァールは、忠誠の証として、摂政となる権利をカトリーヌに譲ることを誓い、カトリーヌは、これと引き換えに、ナヴァールを国王の未成年時に国王に代わり統帥権を持つ、王国総代官に任ずることを約束した¹⁷⁾。

フランソワ2世は12月5日に死去し、シャルル9世が即位した。カトリーヌは21日に摂政に任命され、1561年1月末には、前年5月の王令を確認し、すべての宗教犯を解放して、すべての異端の審理を停止することを命じた。しかし、これは、かえって王国内の宗教対立を激化させた。一方で、ユグノーは、カトリーヌが自分達を支持する方向へ傾きつつあると誤解し、大胆な行動をとるようになる。彼らは、自分達が支配的な地域で、組織的な聖像破壊を開始し、また、公の場で礼拝を行い、自分達の身の安全を守るために武装組織を整備し始めた。他方で、カトリックの側では、カトリーヌの妥協的政策への反発は大きく、各地の高等法院は、プロテスタント教徒に寛容な王令の登録を遅らせたり、その実効性を失わせるような修正を施して登録するなどした。カトリックの説教師は、プロテスタント教徒への憎悪を煽りたて、各地でプロテスタント教徒の虐殺が発生する。また、長年のライバルであったギーズ公と軍最高司令官モンモランシは、政府の穏健策への不満から手を結び、最高司令官の補佐役であるフランス元帥の地位にあったジャック・ダルボン・ド・サン＝アンドレも含め、1561年4月にカトリック防衛のための同盟を形成した。さらに、1561年末には、ナヴァールが、カトリック側に寝返る¹⁸⁾。

このような状況においても、カトリーヌは、大法官ロピタルやロレーヌ枢機卿の協力を得て、教会改革による平和の維持のために努力した。1561年9月には、後にカルヴァンの後継者となるテオドール・ド・ベーズを筆頭とするカルヴァン派の代表と、ロレーヌ枢機卿を含むカトリック教会の代表からなる討論会がボワシーで開催され、教義上の妥協に達する試みがなされた。この討論は、ユーカリストを中心に両派の教義の違いを埋めることはできず、失敗に終わった。しかし、いまだ妥協を諦めないカトリーヌは、1562年1月のサン＝ジェルマンの王令で、昼間に町の城壁の外で武装せずに行うという条件で、ユグノーの礼拝を許可した。この勅令は、条件付きとはいえ、初めてユグノーに法的な承認を与えた画期的なものであったが、当然のことながら、カトリック教徒の激しい反発を招いた。また、プロテスタント教徒との妥協を望むカトリックの穏健派も、両派の共存が不可避的に宗教対立と国家の分裂に繋がることを恐れ、むしろ教義上の妥協に達するための努力を続けるべきだと考えて、1月王令に否定的な態度をとった¹⁹⁾。

3. 第一次内戦, 1562～63年

内戦のきっかけとなったのは、偶発的ともいえ、しかし、当時のフランスの状況では、意図的ではないにしても不可避であったともいえる、一つの事件であった。1月王令に強く反発したギーズは、一度

宮廷を去るが、その廃止のためにモンモランシ、サン＝アンドレらと協力するため、3月再びパリに戻る。その途上、シャンパーニュのヴァシーで、1月王令に反して城壁内の納屋でカルヴァン派が礼拝を行っているのを発見したギーズは、これに抗議した。カルヴァン教徒とギーズ家の家臣の小競り合いは、カルヴァン教徒による投石に怒ったギーズ側が無差別に発砲したことによって、カルヴァン教徒側に数十名の死者を出す「虐殺」事件へと発展してしまう。パリに到着したギーズが、カトリック教徒達によって英雄として迎えられたのに対し、コンデらプロテスタント貴族は宮廷を去り、各地で戦争の準備を始めた。4月2日、コンデは軍を率いてオルレアンを占領する。6日後、コンデは、国王シャルル9世は、カトリック派のリーダー達の囚われの身となっており、筆頭親王家の長男アントワン・ド・ブルボンがカトリック側についた以上、次男の自分が、国王の解放のために、武器をとって立ち上がる必要があるという宣言を発して、自らの行動を正当化した²⁰⁾。

戦争の初期には、ヴァシーの虐殺以前にすでに武装を進めていたユグノー軍が、迅速な行動で、ロワール川沿いのオルレアンに次いで、セヌ川沿いのルーアン、ローヌ川とソーヌ川の合流地点にあるリヨンと、大きな河川沿いにある戦略的に重要な都市を攻略した。カルヴァン派の各地の教会組織は、1560年代初頭から、迫害から身を守るためにすでに組織的に武装し、これはユグノー軍の基盤となったが、これに加え、内戦開始後、封建的關係や友人関係を通じて、あらゆる階層の人々が、コンデの呼びかけに応じて、ユグノー軍に参加したと言われる。また、国王軍からそっくりそのまま寝返った重装騎兵の4つの部隊は、ユグノー軍の騎兵隊の中核となった。ユグノー軍の主な財政基盤になったのは、プロテスタント派の教会からの寄付、カトリック教徒から没収された財産、そして国庫に納められるはずの税金であった。内戦が始まって3カ月程の間に、ユグノー軍の攻撃によって、あるいは、都市の内部でカルヴァン派が武力で権力を奪取することによって、ロワール川沿いのトゥールやブロア、フランス中央部のポワティエやブルジュ、英仏海峡を望むル・アーブル、グルノーブルを始めとするローヌ渓谷のドーフィネの諸都市、ラングドックの多数の都市等、多くの都市が、カルヴァン派の支配下に入った。

ユグノーに対して寛容な態度をとった摂政カトリーヌも、コンデの反乱を許すことは出来ず、カトリック派貴族の率いる国王軍に頼らざるを得なくなる。しかし、国王軍は、そもそも平時の常備軍の規模が限られていたこと、その大部分が、ハプスブルク領ネーデルラントやイングランドからの脅威に対処するため、北東部及び北部に集中していたこと、これら兵力の大部分は重装騎兵であり、歩兵は戦争の度に各地で徴募する必要があったこと、そして、戦時のみ徴募されるフランス歩兵の質は低く、大部分スイスやドイツの傭兵に依存していたが、その契約には費用と時間がかかることなどから、当初ユグノー軍に対処できなかった²¹⁾。

このような状況で、カトリーヌは、傭兵との交渉を行うと同時に、ローマ教皇とフェリペ2世に支援を要請した。フランスにおけるカルヴァン派の勢力増大が、同じくカルヴァン派が広まりつつあったネーデルラントに与える影響を恐れたフェリペは、小規模な軍をフランスに派遣し、さらに、ネーデルラントに駐留している4000のスペイン兵と1500のネーデルラント貴族の騎兵を、フランスに急派するよう、1559年に自分がスペインに帰還した際に摂政に任命した、異母姉マルグリットに命じた。もっとも、この命令に従った後ユグノー軍の攻撃を受けた場合、国境を防衛できないことを恐れたマルグリットは、オラニエ公ウィレムを始めとするネーデルラントの主要貴族の会議に諮り、これら貴族の反対を受け、兵力を派遣しなかった²²⁾。

これに対して、ユグノー軍の側では、コンデは国王への反逆罪にあたる外国への支援要請をためらった。しかし、国王側がスペインと交渉していることが明らかになると、ユグノーの態度は変わる。彼らは、ドイツ傭兵と契約し、エリザベス1世の軍事財政支援を要請した²³⁾。

イングランドは、本来ならば、フランスの国内情勢に大きな関心を寄せるはずである。何よりも、当時の西ヨーロッパの国際関係は、ハプスブルク家とヴァロア家という二大勢力を軸に動いており、イングランドの外交政策も、この大きな枠のなかで決定された。また、ギーズ公フランソワの姪でもある、フランスの先代国王フランソワ2世の王妃メアリー・スチュアートは、スコットランド女王でもあり、この二つの王家の繋がり、イングランドに安全保障上の脅威を与えた。さらに、メアリーは、ヘンリー

8世の姉マーガレットの孫として、イングランドの王位継承権を持ち、フランソワの即位に際してイングランド女王を名乗るなど、その野心を隠さなかった。

イングランドとフランスは、すでに1559年から1560年にかけて、スコットランドをめぐる激しく争った。フランソワ2世が即位した1559年夏、スコットランドでは、プロテスタント貴族達が、メアリーの母で摂政のマリー・ド・ギーズに対して、反乱を起こした。フランスは、マリー・ド・ギーズを支援するため軍隊を急派したが、敗色が濃厚となったスコットランドの反乱派の要請を受けて、イングランド軍が介入する。6月にマリー・ド・ギーズが死去したこともあり、7月にイングランド、フランス両国は、双方がスコットランドから撤退することで和平に達した。ネーデルラントの防衛のためにイングランドとの友好を重視するフェリペ2世が、エリザベスに対して、フランスがイングランドを攻撃した場合、イングランドを支援することを約束し、フランソワ2世による、スコットランドにおけるカトリック信仰維持のための支援要請を拒否したことも、戦争の早期終結に寄与したと思われる。

このように、メアリー・スチュアートとフランスの繋がり、エリザベスに多様な脅威を与えたが、フランスのスコットランド介入が失敗に終わったこと、さらに、1560年12月にフランソワ2世が死去したことで、この脅威はかなりの程度緩和された²⁴⁾。エリザベスが、1562年6月にユグノーの支援要請を受けたのは、このような状況においてであったが、エリザベスは、この時点では、フランス国内の宗教対立に関して確固たる政策を持たずに、カレー奪回のために、それを機会主義的に利用しようとした。カレーの喪失は、イングランドの人々の誇りをひどく傷つけるものであり、さらに、英仏海峡の両岸を支配すれば、スペインとネーデルラントの連絡、そしてフランスとスコットランド東岸の連絡を容易に妨害することが出来るようになり、大陸の二強国に対して、イングランドの立場を著しく強めることになるはずであった²⁵⁾。エリザベスは、9月のユグノー側とのハンプトン・コート条約で、カレー返還の保証としてル・アーブルの占領を認めるという合意を得て、即座にル・アーブルを占領した²⁶⁾。

この間、7月には、徐々に戦争の体制を整えた国王派の軍がパリから南に向かい、まずブロアを手始めにフランス西部の町を攻略し、8月末にはフランス中央部のブルジュを奪って、オルレアンとフランス南部のユグノー軍の連絡を遮断した。その後、国王軍は、ルーアン攻略のために、北部に向かった。ユグノー軍は、ル・アーブルのイングランド軍の支援に期待したが、十分な支援を得られないまま、10月末にルーアンは陥落した。

ルーアンの陥落後、ギーズ公は、ル・アーブルのイングランド軍を攻撃することを望んだが、コンデ公がオルレアンからパリに進撃しているという報を受け、急ぎパリに帰還した。ユグノー軍は、パリ攻撃を諦め、ル・アーブルのイングランド軍との連合を期待して、ノルマンディー方面に向かった。その途上、12月19日に、パリの西方にある町ドルーの南で、国王軍に遭遇し、合わせて3万を超える両軍は、激しい会戦となる。戦いは、国王軍の勝利に終わるが、被害は両軍ともに甚大であり、死者数は合計5千とも言われる。すでに、ルーアンでの戦闘でアントワン・ド・ブルボンが命を落としていたが、ドルーの戦いでは、ユグノー軍ではコンデ公が、国王軍ではモンモランシが捕虜となり、サン＝アンドレは捕虜となった後殺害された。ドルーの戦いは、フランス人同士が殺し合うことへの心理的抵抗を消滅させた点で、その後の内戦に大きな影響を与えた²⁷⁾。

コリニー率いるユグノー軍はオルレアンに撤退したが、勝者の国王軍も激戦からの回復に時間がかかり、何よりも、国王に戦争を続ける財政的余裕はなかった。さらに、そもそもカトリックは、ギーズ家による支配を意味するカトリック派の完勝を望まなかった。カトリックは、内戦の最中にも、ロレーヌ枢機卿をトレント公会議に派遣し、教会改革による宗教的対立の解消を目指した。2月18日、オルレアンを包囲していたギーズ公が、ユグノー貴族に暗殺されたことによって、和平への大きな障害が消える。最終的には、3月に、共に捕虜となったコンデとモンモランシが、解放されて交渉を行い、和平に合意した。合意の結果は、3月19日のアンボワーズの王令である。この王令は、信教の自由をすべての人々に与えながら、プロテスタントの礼拝に制限を設けた。つまり、貴族は、家族や召使いと共に自分の領地で、単なる封土の保持者は、家族と共に自分の家だけで礼拝できるが、それ以外のプロテスタント教徒は、パリとその周辺での礼拝を禁じられ、それ以外の地域でも、礼拝は、一つのバイイ裁判所

管区あるいはセネシャル裁判所管区につき一つの町の郊外に限られた²⁸⁾。

おわりに

1563年3月のアンボワーズ王令を手にしたカルヴァン教徒は、彼らにはるかに大きな礼拝の自由を与えた1562年1月の勅令を懐かしみ、新たな合意を歓迎しなかった。カトリック教徒の反発は、カルヴァン派のそれをはるかに凌いだ。王令は各地で適用されず、両宗派間の対立と憎悪はくすぶり続け、相互の不信は、些細なきっかけから、1567年に再び戦争へと発展する。

この数十年にわたり続くことになる内戦の原因は、一体何だったのか。一時は、貴族達が政治的野心のために宗教対立を利用したことが強調され、この戦いが宗教戦争であったこと自体が否定される傾向にあったが、最近では、16世紀のヨーロッパで、宗教が、単なる神への信仰ではなく、共同体に秩序を与える機能を果たした点に注目して、内戦はあくまでも宗教戦争であったとする見方が、強くなっているようである。マック・P. ホルトが指摘するように、1534年のある日曜の朝、ミサに向かうカトリック教徒達が、カトリック教を批判するポスターを見て大きな衝撃を受けたのは、聖餐象徴説の教義そのものが原因ではなく、むしろその社会的含意が故であった。信者たちは、聖体を受ける前に、まず隣人との不和や不満を解決せねばならず、16世紀のフランスにおいて、聖体拝領は、個人と神の結びつきよりもむしろ、聖体拝領を受ける人々の間の絆を示す象徴として、重要だと考えられた。カトリック教徒は、プロテスタントによる彼らのミサへの攻撃を、彼らの共同体と社会秩序の安定への脅威とみなし、だからこそ、プロテスタントとの共存を拒否した²⁹⁾。

ロレーヌ枢機卿や大法官ロピタルが、教義の統一によって宗教的妥協を達成しようと試みたのは、まさに、両宗派の共存が不可能であると認識していたからに他ならない。彼らの努力が成果を挙げなかったのは、ミサの位置づけを中心に、カトリックとプロテスタントが、教義上の相違を解消できなかったからであり、このことは、純然たる教義上の対立も、内戦の一因となったことを示している。

もっとも、宗教的要因によって、内戦のすべてを説明することは出来ない。内戦を終結させる最善の方法は、おそらくロレーヌが望んだような、カトリック側の圧倒的な軍事的勝利と教義上の妥協の組み合わせであった。しかし、人口比における圧倒的優位にもかかわらず、カトリック側は、近代初頭のヨーロッパにおける国家組織や軍事技術に特有の理由から、ユグノー軍に対する決定的な勝利を得ることは難しかった。つまり、すでに第一次内戦において明らかであったように、常備軍は小さく、分散されており、さらに移動は困難で、大規模な軍隊の集中には時間がかかり、また、傭兵への依存が大きく、これも迅速に反乱に対処することを困難にした。さらに、当時の国家の財政基盤の弱さから、長期にわたって大規模な軍隊を維持することは非常に困難であった。

また、多くの貴族が、上に見たような宗教の社会的機能を重視して、あるいは個人的な信仰から、武器をとったことが事実だとしても、もっと単純に、彼らの階級としてのメンタリティーにも目を向ける必要がある。つまり、戦争の中で名誉を示すことが、騎士階級の存在意義であり、1559年のハプスブルク家との戦争の終結は、彼らから、自分達の美徳を示す場を奪った。多くの貴族は1559年の和平に不満を持ち、1562年の内戦の勃発を歓迎した³⁰⁾。

さらに、しばしば指摘されるように、数多くの貴族が、少なくとも部分的には、政治的野心から行動したことも疑いない。ナヴァール王アントワン・ド・ブルボン、その典型例であろう。彼は1550年代にカトリックとプロテスタントの間を揺れ動いたが、ギーズ家との争いにおいて権力基盤を得るために、プロテスタンティズムを利用したことは明らかである。また、彼が後にカトリックに復帰した重要な理由として、スペイン領に組み込まれているナヴァール王国の大部分の土地を、フェリペ2世から返還してもらうという期待があった³¹⁾。また、こういった貴族間の権勢争いが、壮年期の国王が、幼い王子達を残して急死するという、きわめて政治的に不安定な状況で激しくなったことも、忘れてはならない。

最後に、内戦を、西ヨーロッパ国際関係の大きな枠組みの中で捉えることも重要であろう。もっとも、

第一次内戦では、たしかにスペインやイングランドの介入はあったものの、その規模は限られていた。しかし、1560年代の半ばに、ネーデルラントでハプスブルク家の支配に対する反乱が発生すると、フランス宗教戦争の、西ヨーロッパ国際関係全体における重要性は、格段と増す。フェリペ2世は、カトリック側の勝利をスペインにとっても死活の利益とみなすようになり、エリザベスは、フランス及びネーデルラントにおけるカトリック勢力の勝利を、イングランドの安全に対する決定的脅威と考えるようになる。アルマダの海戦へとつながるこのような対立の経緯を解きほぐすことが、次の課題となろう。

-
- ¹⁾ R. J. Knecht, *Catherine De' Medici*, Longman, Harlow, 1998, pp.54-6; M. J. Rodriguez-Sargado, *The Changing Face of Empire: Charles V, Philip II and Habsburg Authority, 1551-1559*, Cambridge University Press, Cambridge, 1988, p.327.
- ²⁾ Rodriguez-Sargado, *Changing Face*, pp.325, 329.
- ³⁾ R. J. Knecht, *Renaissance Warrior and Patron: The Reign of Francis I*, Cambridge University Press, Cambridge, 1994, pp.142-64, 236-9, 260-3, 282-3; Jonathan I. Israel, *The Dutch Republic: Its Rise, Greatness, and Fall, 1477-1806*, Oxford University Press, Oxford, 1995, pp.45-7.
- ⁴⁾ Knecht, *Renaissance Warrior*, pp.282-3, 313-23.
- ⁵⁾ Mack P. Holt, *The French Wars of Religion, 1562-1629*, Second Edition, Cambridge University Press, Cambridge, 2005, pp.1-3.
- ⁶⁾ Holt, *French Wars of Religion*, pp.19-21; David Potter, *A History of France, 1460-1560: The Emergence of a Nation State*, Palgrave, Basingstoke and London, 1995, p.247.
- ⁷⁾ Knecht, *Renaissance Warrior*, pp.327-8.
- ⁸⁾ Knecht, *Renaissance Warrior*, pp.508-13.
- ⁹⁾ Knecht, *Catherine De' Medici*, pp.50-1.
- ¹⁰⁾ Richard Bonney, *The European Dynastic States, 1494-1660*, Oxford University Press, Oxford, 1991, pp.126-8; Knecht, *Catherine De' Medici*, pp.51-3; Robert J. Knecht, *The French Civil Wars*, Longman, Harlow, 2000, pp.60-1; Potter, *History of France*, pp.248-9.
- ¹¹⁾ Holt, *French Wars of Religion*, p.30.
- ¹²⁾ Holt, *French Wars of Religion*, pp.38-40.
- ¹³⁾ Knecht, *Catherine De' Medici*, pp.56-8.
- ¹⁴⁾ Vincent J. Pitts, *Henri IV of France: His Reign and Age*, The Johns Hopkins University Press, Baltimore, 2009, pp.14-6; Knecht, *Catherine De' Medici*, pp.59-62; Knecht, *French Civil Wars*, pp.64-6.
- ¹⁵⁾ Knecht, *Catherine De' Medici*, pp.62-6.
- ¹⁶⁾ Knecht, *Catherine De' Medici*, pp.66-72; Knecht, *French Civil Wars*, pp.66-71; Pitts, *Henri IV*, pp.17-20.
- ¹⁷⁾ Knecht, *Catherine De' Medici*, p.72.
- ¹⁸⁾ Knecht, *Catherine De' Medici*, pp.72-5; Knecht, *French Civil Wars*, pp.72-7; Pitts, *Henri IV*, pp.23-5.
- ¹⁹⁾ Knecht, *Catherine De' Medici*, pp.77-85; Knecht, *French Civil Wars*, pp.78-80.
- ²⁰⁾ Knecht, *Catherine De' Medici*, pp.87-9; Knecht, *French Civil Wars*, pp.80-6.
- ²¹⁾ Knecht, *French Civil Wars*, pp.86-92; Holt, *French Wars of Religion*, pp.51-4.
- ²²⁾ Henry Kamen, *Philip of Spain*, Yale University Press, London and New Haven, 1997, p.93; Geoffrey Parker, *The Dutch Revolt*, Penguin Books, London, 2002, pp.52-3.
- ²³⁾ Knecht, *French Civil Wars*, p.94.
- ²⁴⁾ R. B. Wernham, *Before the Armada: The Emergence of the English Nation, 1485-1588*, Harcourt, Brace, & World, New York, 1966, pp.247-58; Geoffrey Parker, *The Grand Strategy of Philip II*, Yale University Press, New Haven and London, 1998, pp.148-53; N. A. M. Rodger, *The Safeguard of the Sea: A Naval History of Britain, 660-1649*, Penguin, London, 1997, pp.195-8; David Loades, *Elizabeth I*, Hambledon Continuum, London and New York, 2003, pp.146-8.
- ²⁵⁾ Wernham, *Before the Armada*, pp.244-5.
- ²⁶⁾ Knecht, *French Civil Wars*, p.94; Loades, *Elizabeth I*, p.146.
- ²⁷⁾ Knecht, *French Civil Wars*, pp.96-7, 99-103.
- ²⁸⁾ Knecht, *French Civil Wars*, pp.97-9, 104-14.
- ²⁹⁾ Holt, *French Wars of Religion*, pp.18-9.
- ³⁰⁾ Knecht, *French Civil Wars*, pp.32-4.
- ³¹⁾ Pitts, *Henry IV*, pp.23-4.